

第15回 カラオケ草創期を支えた 平尾昌晃の名デュエット曲

ここ何回かにわたり、青春歌謡の代表作『いつでも夢を』から、エレキ時代到来を実感させた『二人の銀座』まで、デュエットソングについて記してきましたが、昭和歌謡黄金期の昭和53年に大ヒットを記録した、平尾昌晃と畑中葉子の『カナダからの手紙』も忘れられない名デュエット曲でしょう。

平尾40歳、畑中18歳、という年の差22歳コンビで歌われたこの曲は、当時、サラリーマンが行きつけのスナックなどに普及し始めたカセット式のカラオケ装置で、オヤジ世代が後輩の女性社員や店の若いホステスとデュエットするのに最適なナンバーだったような気がします。

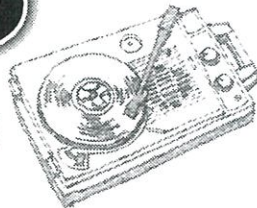
カラオケ装置はまだ8トラックのカセット式で、譜面立てに置かれた歌詞を見つつ、横目でお気に入りのホステスさんにも視線を注ぎながら歌っていたような時代で、お店のママと『銀座の恋の物語』を歌うときとはオヤジ世代の表情が違って見えるものです。

今年の7月に79歳で亡くなった平尾昌晃の告別式が10月30日に東京・青山で営まれましたが、私が書くま

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵 松本浦



でもなく、昭和歌謡史において平尾は多くの遺産を残しています。

祭壇にも飾られていた若き日の写真が語っているように、ロカビリーブームの一翼を担う歌手として、戦後のジャズ、ハワイアンのブームにいまひとつのめり込めなかった若い女性たちの心をわしづかみにしたこと。山下敬二郎ら、何人もの「和製プレスリー」とともに、聴いていて心も体も躍動（ロック）せざるを得ない音楽を伝えた功績は、今のJポップに関わる人たちにも知っておいていただきたいことです。

また、すでにデビュー直後からエルビスやポール・アンカ等のカバー曲以外に、日本の民謡や童謡をロカビリーにアレンジした「和風ロック

ンロール」を試み、披露していたこと。これがのちの小柳ルミ子らに提供した「平尾メロディ」の源流ともなっています。

第2のウエスタンカーニバル・ブームとも言えるグループサウンドの時代に、自らの化身と思いついていっただけであろう布施明を擁して、歌唱力の重要性を示したこと。当時の「一人女性GS」の代表が黛ジュンなら、「二人男性GS」の代表は布施明ですね。

GS終焉後、昭和45年頃から始まる、アイドルとソフト演歌の共存する昭和歌謡黄金期に、アイドルと大人の歌手の双方に名曲を提供し続け、「必殺シリーズ」「熱中先生」等のテレビドラマや宝塚歌劇の主題歌まで実に幅広く後世に残るヒット曲を提供し続けたこと。

さらには、自らの名前を冠した音楽学校を創設して、畑中葉子、松田聖子ら多くの歌手を輩出したことなどがありますが、社会的に最も貢献してくれたこととは、『カナダからの手紙』を自作自演して、当時のオヤジ世代に若い女性と歌う勇気とチャンスを与えてくれたことだったのかもしれない（笑）。